
甘い毒

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘い毒

【Nコード】

N4741B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

従姉洋香に誘われて彼女の作るお菓子を食べる潤一。しかしそれは罠だった。従姉弟同士の恋愛を書いてみました。

第一章

甘い毒

松岡潤一には従姉が一人いる。母の姉の子で名前を日下部洋香という。姓が違うのは母がそれぞれ結婚してそちらの家に入ったからである。歳は洋香の方が七歳も上で彼女は二十三歳、潤一は十六歳であった。

潤一は一人っ子で洋香は下に妹が二人いる。二人は潤一と同じ歳、そして一歳下であり洋香だけが飛び抜けて年長であった。その為潤一にとって彼女は何かえらく年上のお姉さんのような存在であった。実際に彼女はあれこれと潤一に対して幼い頃から世話を焼いてきた。まるで姉の様に。会えばすぐに部屋に入ってきてあれこれ言ったり何かをくれたり。そうした関係であった。

洋香は背が高く胸も大きい。脚もスラリとしていて長い。黒いショートヘアに少し垂れ気味の目、左目のところに泣き黒子がありそれが彼女の色気をさらに悩ましいものにさせていた。潤一は最初はそれに気付くことはなかったが小学生高学年になってから。つまり彼女がさらに奇麗になってきたところで強く意識するようになった。母親同士が姉妹で仲がいいこともあり二人は互いの家をよく行き来した。この日は潤一が洋香の家に来て彼女の部屋の模様替えをしていた。

「そこお願いね」

「はい」

所謂手伝いである。潤一はその茶色い髪を布で覆って作業をしていた。その横ではラフな青いタンクトップに同じ色のジーンズを身に着けた洋香がいる。そうしたラフな格好もまるでモデルの着こなすのように見えていた。

「私はそっちをやるから」

そう言って彼女はベッドの方へ向かった。白い大人の女性のベッ

ドであった。

「そっちは任せたわよ」

「わかりました」

「それでな」

洋香はまた言う。

「これが終わったら一休みしましょう。下でお母さんがケーキを用意してくれてるわ」

「ケーキですか」

「潤一君ケーキ好きだったわよね」

洋香は尋ねる。

「それもチョコレートケーキが」

「ええ、まあ」

潤一もそれに答えた。その通りであった。ケーキはかなり好きである。その中でもチョコレートケーキは彼女の大好物であったのだ。それを聞いて楽しみでないとさえ嘘になる程だ。

それを聞いて元気が出た。部屋の中の机の場所を替える。

今まで机があった場所は白かった。そこだけ汚れない。それが今模様替えをしているということを実に表わしていた。

部屋はファッション雑誌やジュブナイル小説、ハードボイルドの小説等が置かれた棚と洒落たシルバーの時計、そしてテレビがあった。ベッドもあり中々充実した部屋になっている。クローゼットの中は秘密だということなのでそこは知らない。だがこれといった装飾はなく、それよりも小説や時計が置かれることで部屋を飾っているようであった。案外色気のない部屋であったが濃厚な香りが部屋の中に満ちていた。

それが洋香の香りだった。彼女はいつもその身体に甘い香りを漂わせている。それが香水によるものなのか彼女自身のものなのかはわからない。だがその香りが常に漂い、潤一を魅了しているのは事実であった。

「ベッドはこれでよしね」

洋香はベッドを移動させ、それまでベッドがあった場所にテレビを置いて満足そうに言った。手は細くて長いが案外力があるように思えた。

「テレビ、一人で動かしたんですか？」

潤一はそれを見て尋ねた。

「そのテレビを」

見れば大きくてかなり重そうである。だが洋香はそれを一人で持つて動かしたのである。潤一が言うのも無理はなかった。

「コツがあるのよ」

彼女はこう言う。

「それさえわかれば一人でもいけるわよ」

「そうなんですか？」

そうは言われてもにわかには信じられない。

「腰を使うのよ」

「腰!？」

「ええ。ほら、普通は手で持とうとするでしょ」

「ええ、まあ」

潤一は従姉に答えた。

「腰を使ってそれで持つのよ。これだとギックリ腰にもならないわ」

「へえ」

「って知らなかったの？」

驚きの顔を見せる潤一に問うた。

「ええ、今まで」

「ちょっと、私の後輩なんでしょ？」

洋香はその言葉を聞いて苦笑いを浮かべる。実は彼女の通っていた学校に今潤一は通っている。県内でも有数の進学校として知られている。彼がこの学校に入ったのは彼女への憧れのせいだ。だがそのことは決して言わない。

「しっかりしてもらわないと困るわ」

「すいません」

「謝ることはないけれどね。それでね」
彼女は話を変えてきた。

「そっち手伝うわ。それが終わってからケーキにしましょう」
「わかりました」

こうして二人は模様替えを一段落させて下に降りた。そしてケーキと紅茶を楽しみはじめた。潤一に出されたのはチョコレートケーキであった。話通り。

「どうぞ」

「はい」

テーブルに座り差し出されたケーキを見る。外観は普通のチョコレートケーキであった。

だが味は。全く違っていた。

「あっ」

「どう、美味しいでしょ」

「はい、凄く」

甘い。そしてその中に上品さもある。チョコレート味の程よい。かなり美味しいケーキであると言えた。

「これ、何処のケーキなんですか？」

「何処のか知りたいの？」

「ええ、よかったら」

「私が作ったのよ」

「えっ!？」

それを聞いてまた驚いてしまった。

「洋香さんがですか」

「そうよ。驚いたみたいね」

「ケーキ、作れたんですね」

「ええ」

ここで洋香は答えてにこりと笑った。

「そうなのよ。実はケーキの他にも色々と作れるけれどね」

「そうだったんですか」

「こう見えてもお菓子作るのは好きなのよ」

潤一を見て言う。

「それでね。よかったら」

潤一から目を離さない。

「また。食べてみる？」

「洋香さんのお菓子を」

「どうかしら」

くすりと微笑んで尋ねる。その口元には誘う色があったが潤一はそれに気付いてはいない。

「私はいいいけれど」

「じゃあ」

潤一はその誘いにあがらうことは出来なかった。声を少し大きくさせて応える。

「お願いします。また」

「そう。じゃあまたね」

「はい、お願いします」

彼は嬉しかった。美味しい、しかも洋香が作ったお菓子をこれからも食べられるからだ。だがそこにある罠には気付かなかった。実は彼女はそこに毒を仕込んでいたのである。甘い毒を。

第二章

彼はそれから洋香の家に呼ばれてお菓子を食べた。洋香が作ったものを彼女の母、潤一の伯母が用意してくれているものである。作るのは洋香で用意するのは伯母であった。

「今日はこれよ」

黒いセーターとズボンの上に白いエプロンと被りものの洋香が彼にそのお菓子を出してくれた。

「シュークリーム」

「何か、凄いふくらとして」

テーブルに座る潤一はその大きなシュークリームを見て声をあげる。

「美味しそう」

「美味しいわよ」

洋香はにこりと笑って彼にそう言ってきた。

「さっき味見してみたけれどかなりね」

「じゃあもらっていいですか？」

「ええ、どうぞ」

にこりとした笑みのまま応える。

「召し上がれ」

「はい」

その言葉を受けてからシュークリームを手にとって口に入れる。するとシュークリームの薄い皮の中からとろりとしたクリームが出て来た。それがたまらなく甘かった。

「うわ」

「どうかしら」

洋香は潤一が口に入れ終えたのを見てからまた声をかけてきた。

「美味しい？」

「ええ」

こくりと頷いてその言葉に答えた。

「淒く」

「そう、よかったわ」

その言葉を受けて目をさらに細めてきた。

「一生懸命作ったから。そう言ってもらえると」

「洋香さんってお菓子は何でもいけるんですか？」

「洋菓子はね」

「ふうん」

「他にもティラミスとかも作れるわよ」

「ティラミスまで」

「本も持ってるしね」

「あれっ、持ってたんですか」

部屋の模様替えの時には見なかったからそれは意外だった。

「ええ。それを見ながら作ってるのよ」

「そうだったんですか」

「お菓子ってね、難しいのよ」

そのうえでこう述べた。

「何かと。温度の調節や泡立て方とか」

「そうらしいですね」

これは聞いたことがある。実際にやったわけではないので実感はないが。

「後はね」

「はい」

「砂糖とかの量も。卵とかかなり使うしね」

「色々使うんですね」

「一番大変なのがアイスクリームなのよ」

どうやら彼女はそれも作れるらしい。かなりのものであるのがわかる。

「お砂糖と卵とミルクを淒い使うから。それ作ったら太るのもわかるわ」

「アイスクリームって確かに太りますよね」

「あとジェラートも」

「僕あれも好きで」

「潤一君ってお菓子好きなのね、本当に」

「ええ、まあ」

その通りである。否定はしなかった。

「けれど洋香さんのは特に」

「ふふ、有り難う」

「何か最近ここに来たら甘い匂いがして」

「お菓子の匂いね」

「はい。何か来るのが楽しいです」

「そう言ってもらえると嬉しいいわ。実はお菓子作っても食べてくれる人がいなかったのよ」

「そうだったんですか」

「お父さんとお母さんだけ。けれどそれじゃ寂しいでしょ？」

「それもそうですね」

やはり何かを作ったなら多くの人に食べて欲しいのが人情というものである。洋香もそうであったしこれは潤一もわかる話であった。

「だからね。お願い」

「洋香さんのお菓子を」

「是非食べて欲しいのよ」

潤一の目を見て言う。

「いいかしら」

「喜んで」

実は潤一がこう言うのも計算している。だがそれは口には出さない。

「洋香さんのお菓子が食べられるなら」

「じゃあまた来てね」

「はい」

「お菓子、どんどん作ってあげるから」

こうして潤一は洋香のお菓子を食べられることになった。彼にとつては非常に嬉しいことであり実際にその甘いお菓子を堪能した。そんな日々が続いた。

「今日はこれよ」

桃のムースであつた。冷蔵庫から取り出したそれはいい具合に固まっていた。

「かなり時間がかかったけれど」

「桃をすり入れたんですよね」

「ええ、そうよ」

「そりゃ時間もかかりますね」

「だって食べてもらいたいから」

潤一の向かいの席でにこにこしながら述べた。

「自然とね。力も入ったのよ」

「僕に食べて欲しかったんですか」

「そうよ」

洋香は言った。

「だから作ってるんだし」

「あの」

前と話が変わってきていることを言おうとした。

「確か食べてくれる人が何か」

「私何か言ったかしら」

上を少し見たとぼけた。

「そうなんですか」

「御免なさいね、ちょっと覚えてないわ」

「はあ」

何かかなり白々しくかわされてしまった。

「それでね」

「はい」

話は洋香のリードで進む。

「ムースの味、どうかしら」

「味ですか」

「そうよ。ちょっと食べてみて」

「ええ」

言われた通りに食べてみる。スプーンで口に入れる。すると桃のあの穏やかでそれでいて強い甘みが口の中を支配したのであった。

「美味しいです」

潤一は口元を緩ませてそう答えた。

「今日のも」

「そう、よかったわ」

これこそ洋香が待っていた答えであった。

「このムースね、実は特別な作り方をしたの」

「特別なですか」

「そうよ。知りたい？」

潤一の目を覗き込んで言う。その顎は重ね合わせた自身の手の平の上に置いている。

「よかったら教えてあげるけれど」

「それじゃあ」

潤一は半ば無意識のうちにそれに乗った。

「教えてくれますか？」

「ええ、いいわよ」

顔を少し左に傾けて頷いてきた。

「じゃあまずはムースを食べてからね」

「はい」

そのままムースを食べ終えた。それから洋香に連れられて部屋へと入るのであった。

第三章

部屋の中は模様替えした前と同じであった。香りもまた同じである。

「それでね」

「ええ」

洋香は机から一冊の本を取り出してきた。便箋があちこちに入れたかなり読み込まれているのがわかる。

「ここなんだけれど」

開いたところにあのムースがあった。

「どう、かなり複雑でしょ」

レシピを見せながら説明する。

「ムースって作るの大変なんだから」

「そうみたいです」

「特に果物のはね」

彼女は言う。

「手間隙がかかって。それに美味しくするのも難しくて」

「そんなにですか」

「けれど今回は上手くいったみたいね」

まずはそれに微笑んでいた。

「美味しかったでしょ、あのムース」

「ええ、とても」

それは事実だった。

「よかった。そうじゃないと作った介がないわ。それでね」

「それで」

「今もまだ甘い匂いがするわよ」

「甘い匂い？」

潤一は最初それはこの部屋の匂いかと思った。

「そうですね」

そして部屋を見回しながら言った。

「この部屋って何か甘いと思ったたらお菓子の匂いだったんですね」
「違うわよ」

だがその言葉は目を細めて否定した。

「そうじゃないのよ」

「そうじゃないって」

何か洋香が何を言っているのかわからなくなった。

「どうということなんですか」

「潤一君からよ」

目を細めたままこう言ってきた。

「その匂いは」

「匂いって」

今度はムースの匂いかと思った。

「さっきのムースの」

「そうよ。凄く香ってるわ」

洋香は潤一を見てこう言った。

「何かね」

「え、ええ」

ここで彼女は自分の身体を彼に寄せてきた。

「潤一君がお菓子になったみたいに。ねえ」

彼女は言う。

「今ね。お母さんいないのよ」

「はあ」

抱きついてきた洋香を拒むことは何故か出来なかった。目と目が合う。その目は潤んでいた。

「私と潤一君だけなのよ。だから」

さらに言った。

「食べていいかしら」

「何を」

「お菓子を。ねえ」

顔をさらに近付けてくる。目を潤一の目から話はしない。

「食べて・・・・・・・・いい？」

「お菓子って」

「今甘い香りがするお菓子よ」

それが何か。もう言うまでもなかった。

「潤一君さえよければ」

「まさか今までののは」

「そうよ。ずっと前からね」

目が次第に潤んでいく。魔法の様に。

「いいわよね。もう私」

「洋香さん・・・・・・・・」

「ん・・・・・・・・」

目を閉じて唇を合わせていく。そしてそのまま。二人は洋香のベツドの中で並んで横になっていた。

「はじめてだったのね」

「・・・・・・・・はい」

潤一はベツドの中でこくりと頷いた。

「まさか洋香さんとこんな」

「私、前から好きだったのよ」

その洋香は彼の横で顔を赤らめさせていた。

「だから。こうして」

「お菓子で」

「ええ。潤一君お菓子が好きだって聞いたから」

「じゃああのお菓子は僕を誘う為に？」

「それもあるのは本当よ」

それは素直に認めた。

「けれど。それだけじゃないわ」

「それだけじゃないって」

「美味しかったでしょ？」

潤一の方を見て尋ねてきた。

「私のお菓子」

「はい、それは」

そのことは素直に頷くことができた。

「凄く。とても美味しかったです」

「そう言つて貰えるのが嬉しかったから」

彼女は言う。

「少しずつ。そう思えてきたのよ」

「そうだったんですか」

「それでね、潤一君」

顔は赤いままだったがその赤が変わっていた。大人の赤から少女の赤に変わっていた。それは潤一が今まで見たことのない洋香の顔であった。その顔を見て彼は胸の奥の何かが大きく動いたのを感じた。

「これから。作っていいかな」

「お菓子を」

「ええ。他のも作れるけれどやっぱりお菓子をね」

少しモジモジした様子になっていた。今までとは全然違っていた。

「いいかしら」

「はい」

潤一はその申し出を断ることはなかった。

「僕からお願いします。是非」

「いいのね」

その言葉を確かめる目になっていた。それはやはり少女のものであった。

「本当にそれで」

「だって。僕も」

潤一は勝負に出た。

「洋香さんのこと好きですから」

「えっ」

「洋香さんのお菓子これからも食べたいです。いいですよね」

「悪いわけないじゃない」

洋香の顔が笑みに変わった。にこやかな笑みに。

「だから作ってるのに」

「それじゃあ」

「ええ。これから宜しくね」

「はい」

潤一も笑顔になった。その笑顔で頷く。

「じゃあ今度は」

「何がいいのかしら」

「洋香さんの作ったものなら何でも」

「あら、言うわね」

それでも言われて悪い気がしないのも事実だった。

「じゃあまた今度ね。といきりの作ってあげるわ」

「うん」

潤一はベッドの中で頷いた。お菓子ではじまりお菓子が結び付けた恋だった。甘い誘いが甘い恋に成就した。そんな話であった。

甘い毒 完

2006・10・13

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4741b/>

甘い毒

2010年10月8日15時02分発行